



地域医会だより

平塚市医師会皮膚科部会

第39回例会 テーマ「美容皮膚科のデビュー」

出席者：21名

日時：2006年1月25日（水） 18:45～

場所：平塚プレジール

司会：西沢春彦（平塚共済病院皮膚科）

I アロック商品説明（18:45～19:00）

協和発酵工業株式会社

II 講演（19:00～20:00）

講師：漆畑修先生（東邦大学医療センター大橋病院 皮膚科部長・美容医学センター長）

【要旨】わが国における美容皮膚科学の芽生えは1960年前後とされている。しかし、実は明治の創設当時の日本皮膚科学会では、尋常性白斑の美容的な側面もディスカッションされており、もともと皮膚科学は美容皮膚科も含んだ形で出てきた学問だったと思われる。その後、戦争などの影響で学問の世界だけでなく、一般の社会からも美容が遠ざけられた時期があった。戦後になり世の中が平和になるにつれ、次第に一般の社会で美容というものが大変価値の高いものだという認識が高まったが、医学の分野で美容皮膚科が認知されるまでには長い年月が費やされた。

美容皮膚科がわが国でデビューし表舞台に立つまでの歴史を1950年代から10年刻みで紹介し、美容皮膚科の現状とこれからの方向について私見を述べてみたい。

III 症例提示（20:00～20:15）

相原英雄（済生会平塚病院形成外科・皮膚科）：当院における炭酸ガスレーザーの現状について

IV 懇親会（20:15～）

共催：平塚市医師会皮膚科部会、協和発酵工業株式会社

（文責：西沢春彦）

第40回例会 テーマ「疣贅の診断と治療」

出席者：41名

日時：2006年5月17日（水） 18:45～

場所：平塚市地域医療管理センター

司会：木花いづみ（平塚市民病院皮膚科）

I ルリコンクリーム商品説明（18:45～19:00）

科薬株式会社

II 総会（19:00～19:10）

III 講演（19:10～20:10）

講師：江川清文先生（熊本大学医学部附属病院・皮膚科講師）

【要旨】疣贅^{いぼ}は、ヒト乳頭腫ウイルス（HPV）感染により生じるありふれた皮膚疾患の一つである。生命を脅かすような重篤な疾患でもなく、その診断も通常容易であるが、整容面を含み患者のQOLが著しく障害されている場合や、これと言った特効的な治療法が無い^{いぼ}ため医師がその扱いに苦勞することも多い。そのことには、(1) 疣贅の病態の詳細については未だもって余り良く分かっていない、(2) 現行の多様な疣贅治療法の、作用機序や有効性についての情報が不十分である、等が関係していると思われる。

講演では、「疣贅とは何か」、HPV感染症に関する基礎的事項について、特に治療にも関連してくるHPVの感染標的について最近までの知見を纏めるとともに、それらを参考に「疣贅治療とは何か」、現在行われている様々な疣贅治療法について、作用機序別に解説すると共に、治療の実際や利点、抱える問題点等について述べた。

IV 症例提示（20:10～20:30）

栗原誠一（湘南皮膚科）：VitD3軟膏による色素沈着

木花 光（済生会横浜市南部病院皮膚科）：足底の脂漏性角化症？／水痘、反回神経麻痺

V 懇親会（20:30～21:30）

共催：平塚市医師会皮膚科部会、科薬株式会社

（文責：福永有希）

第41回例会 テーマ「STD～花か柳か、はたまたヴィーナスか～」

出席者：33名

日時：2006年9月27日（水） 18:45～

場所：平塚市地域医療管理センター

司会：高橋昇司（たかはし皮膚科）

I イトリゾール商品説明（18:45～19:00）

ヤンセンファーマ株式会社

II 講演（19:00～20:00）

講師：中嶋 弘先生（横浜市立大学 皮膚科名誉教授）

【要旨】性病（venereal disease, VD）は、「ヴィーナスの病気」が原義で『ミロのヴィーナス』や『ヴィーナスの誕生』に見るような明るい美の極致をイメージさせるが、実は暗い「愛の病気」、梅毒、淋疾、軟性下疳、ソケイリンパ肉芽腫（第四性病）で、性（病）の明と暗を見事に示唆した病名である。わが国にはかつて花柳病という呼び名があったが、これは花柳界で感染する病気を意味し、何となく明るく楽しいイメージがあり、「ヴィーナスの病気」と一脈相通じるところがある。梅毒は、コロンブスがアメリカ大陸から持ち帰ったと言われており、その後ヨーロッパで猛威をふるった。そして「文明は梅毒化である」とまで言わしめるほど、偉大な発見や偉大な芸術を生み出したことも事実であるが、その裏では計り知れない悲劇や犠牲が払われたものと思われる。現在はペニシリンの出現により治癒し得る疾患になったが、依然として小流行を繰り返しており、撲滅されていない。人類が生存する限り、病態を変えることがあっても、消滅することのない、懲りない病気なのであろう。最近では性病の診断・治療方法は大きく進歩したが、性行為も変遷し従来のものとは異なった病状を示すこともあり、またヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染症／エイズ（acquired immunodeficiency syndrome, AIDS）のように新たに出現したものもあり、著しく多様化している。また、病名に関しても性感染症（sexually transmitted diseases, STD）の概念が普遍化し、性病は風前の灯火である。美と愛の神ヴィーナスも歳には勝てず引退とは寂しい限りである。STDには多くの病気が含まれているので、今回は皮膚科に馴染みのある梅毒、HIV感染症／エイズ、尖圭コンジローマ、性器ヘルペス、ケジラミ症、疥癬などを、わが国の最新の感染症法に基づいて解説し、時間が許せば性病に係わる雑話を織り込みながら述べてみたい。

III 質疑応答（20:00～20:30）

IV 懇親会（20:30～21:30）

共催：平塚市医師会皮膚科部会、ヤンセンファーマ株式会社

（文責：福永有希）



地域医会だより

三浦半島皮膚科懇話会 横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会

第37回三浦半島皮膚科懇話会 第20回横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会

日 時：2006年10月28日（土）17:30～

場 所：ホテルトリニティ横須賀

製品紹介：抗ウイルス化学療法剤「バルトレックス」（グラクソ・スミスクライン株式会社）

特別講演：アトピー性皮膚炎の治療

講 師：西岡 清（横浜市立みなの赤十字病院院長）

アトピー性皮膚炎の治療について、厚生労働省の研究班と日本皮膚科学会とから「治療ガイドライン」が発表されている。また、タクロリムス外用薬が治療薬として導入され、本症患者の治療についての混乱はおさまりつつあるかに見える。しかし、臨床の場では、相変わらず、難治性の成人型アトピー性皮膚炎患者がドクターショッピングを重ねているのが現状のようである。

アトピー性皮膚炎の治療には、皮膚症状を悪化させている要因を明らかにすることが大切である。一般に、薬物療法特に外用療法が行われ、ステロイド外用薬とタクロリムス外用薬に依存した治療が行われている。勿論、これらの薬物は有効な治療手段であり、また、保湿剤の使用は非常に有効であり、治療効果をあげている。痒みに対する抗ヒスタミン薬の効果も見逃すことは出来ない。しかし、これらの治療手段は、対症療法の一つであることを念頭においておく必要がある。原因的治療を模索する必要がある。そのためには、アトピー性皮膚炎の症状を引き起こす原因が必ずあると考えて治療に当たるべきであろう。対応時間が長くかかる本症患者の診療は、忙しい第一線の皮膚科医にとってはわずらわしささえ感じさせるものであるが、最初の診察時に、患者との「原因探しゲーム」を提案するのも、本症治療にとっては有効な手段かもしれない。うまくゲームに引き込むことが出来れば治療効果が格段に向上する。しかし、本症患者はなかなか手ごわい人たちであり、決して、われわれの土俵に上ろうとはしない。臨床テクニックが問われるところである。

アトピー性皮膚炎の悪化因子が次々と明らかになってきている。悪化因子についてわれわれが集めた情報を紹介した。また、アトピー性皮膚炎に対する新たな治療手段が必要となっており、現在われわれが取り組んでいる核酸医薬についての知見を紹介した。





地域医会だより

厚木市皮膚科医会

厚木市皮膚科医会は年に2回の例会を開催しております。講師は東海大学、北里大学、横浜市立大学、東京慈恵会医科大学などの先生にお願いしています。最近では東海大学の梅澤慶紀助教授を講師として招請し、平成18年11月26日（日）に第21回例会を開催しました。厚木市医師会会員だけでなく近隣の先生方にも多数出席いただき、いつになく盛会でした。ありがとうございました。今後も地域に密着した皮膚科医会として活動していきたいと考えております。諸先生方の御指導、御鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

(林 正幸)



地域医会だより

鎌倉市皮膚科医会

2006年度 第1回鎌倉市皮膚科医会

日時：2006年6月6日（火） 19:00～

場所：鎌倉プリンスホテル

講演：とびひの治療～常識を見直す～

講師：馬場直子先生（神奈川県立こども医療センター 皮膚科）

小児科医会の先生方と合同で開催しました。夏季の流行を前に、消毒の是非や耐性菌と抗生剤の選択など、最近の知見を交えての講演でした。

(原 尚道)